



# セヴラック通信

Courrier de Séverac

第16号

日本セヴラック協会創立10周年記念演奏会

歌劇 **風車の心** 全2幕  
演奏会形式  
Opéra «Le Cœur du Moulin» pièce lyrique en deux actes

2014年5月25日(日) 14:00 開演

渋谷区文化総合センター大和田 伝承ホール

2014 前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

日本セヴラック協会 10 周年に寄せて●館野泉 .....	2
第1部 お話と演奏 ジャン＝ジャック・クバイネ氏を迎えて .....	4
歌曲《夢》と《梟》のこと●末吉保雄 .....	4
歌詞対訳●鎌田直純 .....	5
第2部 歌劇《風車の心》	
出演者プロフィール .....	6
歌劇《風車の心》日本セヴラック協会版のこと●末吉保雄 .....	8
歌劇《風車の心》あらすじ .....	10
出演者より●鎌田直純・森朱美 .....	11
日本セヴラック協会の10年を振り返って●濱田滋郎 .....	12
〈連載〉セヴラック随想(7) ●濱田滋郎 .....	14
第21回例会の報告●鎌田和夫 .....	17

日本セヴラック協会創立10周年記念演奏会

歌劇 **風車の心** 全2幕  
演奏会形式  
Opéra «Le Cœur du Moulin» pièce lyrique en deux actes

2014年5月25日(日) 14:00 開演

渋谷区文化総合センター大和田 伝承ホール

お話と演奏 **ジャン=ジャック・クバイネ氏を迎えて**

セヴラック：《夢》 エドガー・アラン・ポー詩、ステファヌ・マラルメ訳詩

《梟<sup>ふくろう</sup>》 シャルル・ボードレール詩

Déodat de SÉVERAC : Une Rêve (Edgar Allen POE, traduit par S. MALLARME)

Les Hiboux (Charles BAUDELAIRE)

ジャン=ジャック・クバイネ (バス) Jean-Jacques Cubaynes

水月恵美子 (ピアノ)

～ 休憩 ～

歌劇 《**風車の心**》 日本セヴラック協会版による日本初演

モーリス・マーグル詩 / デオダ・ド・セヴラック作曲

末吉保雄編曲・構成・芸術監督

Poème de Maurice MAGRE / Musique de Déodat de SÉVERAC

extraite et arrangée par Yasuo SUEYOSHI

第1幕 Act 1

～ 休憩 ～

第2幕 Act 2

ジャック： 鎌田 直純 (バリトン)  
マリー： 森 朱美 (ソプラノ)  
粉挽きの老人： 森田 学 (バス)  
ジャックの老母： 小阪亜矢子 (メゾソプラノ)  
ピエール： 根岸 一郎 (バリトン)  
ルイゾン： 本宮 廉子 (ソプラノ)  
ふくろう： 柴田 暦 (朗読)  
村人たち： 日本セヴラック協会会員有志

館野 泉 / 久保 春代 / 平原あゆみ / 末吉 保雄 (ピアノ)  
木村麻衣子 (フルート) / 石川絵津子 (フルート、リコーダー)  
會田 瑞樹 (打楽器)

訳：鎌田直純 / 字幕：末永理恵子

プログラム制作：亀田正俊

衣装協力：石川絵津子、木村麻衣子、松田純子、本宮廉子、山根京子  
事務局：伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

## 日本セヴラック協会 10周年に寄せて

館野 泉

セヴラックのことを知ったのは19歳のとき、アルフレッド・コルトーが書いた『フランス・ピアノ音楽』（安川定男・加寿子 共訳）という本からだ。この本は持ち歩いてボロボロになるまで読んだから、いま手元にあるのは3冊目。セヴラックだけでなく、ドビュッシー、ラヴェル、フォーレ、フランクに加え、当時日本ではまだあまり知られていなかった作曲家達、たとえばデュカ、シャブリエ、ダンデイ、ルーセル、サテイ、プーランク、ミヨーなどのことが語られていて、眼の眩むような思いをしたものだが、その中で特に惹かれたのがセヴラックだった。彼の作品は曲の名前が変わっていた。「耕作」や「種蒔き」「春の墓地の一隅」「リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ曳きたち」など、他の作曲家とタイトルの付け方が全然違って、まずそこに惹かれた。

当時はLPはまだ出ていなくて、楽譜もヤマハでは手に入らなかった。大阪のササヤ楽譜に頼んだら取り寄せてくれて、手に入ったのが《ラングドック地方にて》。これだけだったけれど、ひとつ手に入っただけでうれしかった。とても大事にした。

実際にセヴラックを弾いたのは、芸大に入って2年位経ってからだ。それまではただ楽譜を見ていたのだが、安川加寿子先生のレッスンに《ラングドック地方》を持っていった。先生は「あなた、どうしてセヴラックなんて知ってるの」と、とても驚かれた。

セヴラックの音楽には、その土地に住んでいる人だけが見る風景がある。音域が広く和音も厚くてしっかりして、響きに深みがあり、内声がとても豊かだ。そして光がいろいろなレベルでぶつかっているのが感じられる。

作曲家の遺跡とか、生まれたところにはあまり興味がないが、でもセヴラックだけは別だった。「この作曲家の生まれたところに絶対に行ってみたい」と思った。1955年に楽譜を手に入れてからずっと思い続け、ようやく叶ったのが2000年の夏。場所もよくわからず、トゥールーズからタクシーに乗って手探りで、「行けばなんとかなる」という気分だった。生地のサン＝フェリックス・ロラゲ村にたどり着くと、ツーリスト・ビューロがあった。「作曲家のセヴラックの家はどこですか」と尋ねたら、「あなたのすぐ後ろですよ」。その家は村の広場の一角にあった。ノックしたが誰もいない。近所のレストランで尋ねたら、セヴラックの子孫のカトリーヌ・ブラック・ベレール夫人は、避暑で別のところに行っていると言われた。

その年にセヴラックのピアノ作品集の録音を完成させ、翌2001年、CDを持って再び村を訪れた。その日はたまたま7月20日だった。今度はブラック・ベレール夫人がいらしたが、「今日はセヴラックの誕生日でコンサートがあって、その後にはパーティーがあって料理も出さなければいけないので、ものすごく忙しい」と言う。しかしCDを渡すと、フランス語で書かれた略歴を見て、家に入れてくれた。30分くらい話をし写真を一緒に撮った。

2000年と2001年は誕生日のころに行ったが、2002年は1月3日に訪ねた。そのときはベレール夫人に、日本にセヴラック協会を設立するから名誉会長になって頂きたい、とお願いに行った。ベレール夫人は、フランスのセヴラック音楽祭監督ジャン=ジャック・クバイネさんとの食事会をレストランでセットしてくれて「大変名誉なことだ。私たちも喜んで協力します」と応えてくれた。その翌日にクバイネさんのトゥールーズの家に呼ばれ、いろいろと珍しい楽譜を見せてもらいコピーも頂いた。クバイネさんもセヴラックのことに興味を持った日本人が来てくれたことに、とてもうれしい様子だった。

そしてフィンランドに帰ったのが1月6日。私が倒れたのはその3日後の1月9日、タンペレでのリサイタルのときだった。

2003年5月、日本セヴラック協会がスタートしたのは、私が病気で倒れた後のことで、当初どれだけ続いていくのか不安だった。しかしセヴラックという作曲家は、みんなが親しみを抱く、大事にしていきたいと思う作曲家で、その輪が固まってこうして10周年を迎えることができた。

10年の間にはいろいろな良い企画があった。松本智勇さんの興味深いお話や、特にオペラは、末吉保雄君が細かく取り上げ本当に良い解説をしてくれて、鎌田直純さんら素晴らしい演奏家たちが歌って、みんなの力が合わさって続いてきている。

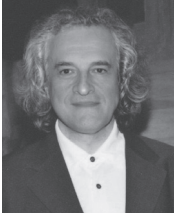
フランスとも交流ができ、クバイネさんたちがとても喜んでいる。セヴラックの作品は、楽譜に残っているものや演奏できるものが少なく、大掛かりな作品で取り上げられるのは今回のオペラ《風車の心》くらいだ。このオペラを日本で上演し、来年はセヴラックが生まれ育ったサン=フェリックス・ロラゲ村に行き、セヴラック音楽祭で上演する。すごく良い形になった。

この音楽祭は、毎年、セヴラックの誕生日にコンサートを行う。セヴラックの作品にこだわらず、音楽に対する愛情が感じられるものなら、いろいろ取り上げようというのが、クバイネさんの考え方だ。日本のセヴラック協会もその考えに沿ってきた。そして、これからも文化や文学とつながりを持ちたいと思っている。セヴラックは、当時の画家たちと交流し、自身も絵を描き、文学にも詳しくあった。そのように間口を大きくして南仏ラングドックの文化を広めていくことも、これからやっていきたいと思う。

私は、セヴラックに対して因縁のようなものを感じている。40年もの間、セヴラックのピアノ曲全集の録音を作りたいと思い続け、ようやく完成したCDを持って念願だったセヴラックの家に行き、ブラック・ベレール夫人やクバイネさんに会うことができた。セヴラックのことが実現できて、40年の演奏生活の区切りが達成された途端に、倒れてしまった。左手で演奏活動をすることになったときも、どこか上のほうで「そうやれ」、という人がいるのかなと思ってしまった。多少運命論的なところはあるかもしれない。協会設立から10年が経ち、来年はフランスでオペラの上演もする。そして、また新しくなにか考えていかないと、と思っている。

(談)

## 第1部 お話と演奏 ジャン=ジャック・クバイネ氏を迎えて



### ジャン=ジャック・クバイネ Jean-Jacques Cubaynes (バス)

トゥールーズ生まれ。トゥールーズ・キャピトル劇場でオペラ歌手としてのキャリアを開始、これまでにフランスの著名な劇場の殆ど全てに出演したほか、ヨーロッパ各地の音楽祭や演奏会でも活躍。「デオダ・ド・セヴラック〜ガブリエル・フォーレ・アカデミー」の開催やアンジェ・ナント・オペラ芸術顧問（2002～03）など幅広く活動。1994年よりデオダ・ド・セヴラック音楽祭芸術監督。



### 水月恵美子 (みづき えみこ・ピアノ)

桐朋学園大学卒業後、日本フィル、関西フィル等と共演。ジュネーブ国際コンクール指揮者部門東京予選におけるピアニストを務める。1987年より館野泉氏の推薦によりフィンランド政府給費留学生としてフィンランド国立シペリウス・アカデミーで学び、優秀な成績で修了。東京やヘルシンキを中心にソロ、室内楽など多岐にわたる活動を行っている。

## 歌曲《夢》と《梟<sup>ふくろう</sup>》のこと

末吉保雄

セヴラック（1872-1921）は、1896年からパリに住みました。ヴァンサン・ダンディ（1851-1931）他が創設したスコラ・カントルム（“聖歌学校”の意）を中心に学び、本格的な作曲活動を開始しました。そして歌劇《風車の心》初演の翌年、1910年、パリから南西仏ピレネー山中の小さな町セレに移りました。

多くが作曲されたピアノ曲と歌曲への取り組みは、その〈パリ時代〉に始まります。ピアノ曲はセレでも書き続けられましたが（現在、音楽之友社から全4冊の曲集が刊行）、歌曲のほとんどは、この〈パリ時代〉に作曲されています。

《夢》は、1901年の作品。エドガー・アラン・ポー（1809-1849）の詩、そのステファヌ・マラルメ（1842-1898）の訳に依っています。セヴラックと親交のあったオディロン・ルドン（1840-1916）が、その前年、ポーの詩による版画（6枚の連作）を発表したことに啓発されたと思われます。なお、原曲は、本日の演奏者クバイネ氏のような低いバリトンのために作曲され（現在は、より高く移調した譜が市販されています）、楽譜にはルドンへの献呈が記されています。

《梟》、1898年、シャルル・ボードレール（1821-1867）のよく知られた詩に作曲されました。ピアノの、装飾音を絡めた和音の反復から、この鳥の神秘的な特徴がもたらされます。《風車の心》でも、梟とこのモチーフが、再び重要な役割を果たすことにご注目ください。

## 夢

エドガー・アラン・ポー  
ステファヌ・マラルメ仏訳

暗い夜の幻影に  
私は過ぎ去った喜びを夢見た。  
しかし、喜びと光ですっかり目覚めた夢が  
壊れた心を癒しはしない。

ああ、過ぎ去った昔を照らす光で、  
周囲にあるものに  
眼差しを向ける人にとって、  
夢は昼間であるということにはなるまいか？

世の全てが私を咎める時  
この聖なる夢、この聖なる夢が  
孤独な魂を導いて、輝かしい陽の光のように、  
私を楽しくさせてくれた。

そうだ、夜と雷雨の中で、  
その光が遠くに震えてはいても、  
真実の昼の天体のもとで、  
何がああ光よりも輝くことができただろう。

(鎌田直純訳)

## 梟

シャルル・ボードレール

黒い木松いちょうの木の枝に  
梟たちは並んでとまっている。  
異教の神々のように  
赤い目で見つめ、思索にふける。

彼らは動くことなく止まり続ける。  
傾いた夕陽が追い立てて  
夕闇が生まれる  
憂愁の時が来るまで。

彼らの姿は賢人に悟らせる。  
この世では  
興奮と動きを恐れよと。  
過ぎゆく影に心を奪われる者は  
居場所を変えようとした罰を  
永遠に受けるのだ。

(鎌田直純訳)

## 第2部 歌劇《風車の心》

### 出演者プロフィール



#### 鎌田 直純 (かまた なおよし・バリトン/ジャック)

東京藝術大学大学院修了。大学院在学中の82年渡欧。パリ・エコール・ノルマル音楽院首席修了。パリを中心に演奏活動。92年に帰国後、多数の舞台に出演。ジャン・フルネ指揮による『ベレアスとメリザンド』のベレアス、フォーレ『レクイエム』のCDでバリトン・ソロを歌う。フランス歌曲を中心に新作初演など幅広いジャンルで活動をしている。東京学芸大学教授、二期会、日本フォーレ協会、コンセルC、日本セヴラック協会会員。



#### 森 朱美 (もり あけみ・ソプラノ/マリー)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学大学院修士課程オペラ専攻修了。二期会オペラスタジオ第39期修了。修了時に優秀賞受賞。文化庁オペラ研修所第11期修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに留学。ジャンピエール・ブリヴェ氏に師事。日本セヴラック協会会員。二期会会員。日本フォーレ協会会員



#### 森田 学 (もりた まなぶ・バス/粉挽きの老人)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。東京学芸大学大学院教育研究科修了。1997年よりボローニャ大学文学哲学学部やジェノヴァ・パガニーニ研究所などで研究活動、およびカルロ・フェリーチェ劇場などで演奏活動をおこなった後、2004年に帰国。イタリアを中心とした音楽劇の研究、演奏をおこなっている。『音楽用語のイタリア語』、『オペラ事典』（共著、監修）など著書も多い。



#### 小阪亜矢子 (こさか あやこ・メゾソプラノ/ジャックの老母)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。尚美ディプロマ科声楽部門修了。CRD ヴィル・ダヴレー音楽院修了。フランス国家資格DEM取得。第35回フランス音楽コンクール声楽部門第2位、日仏音楽協会=関西賞受賞。フランス歌曲を中心に演奏する他、オペラ、宗教曲のソリストとして活躍。演出、字幕翻訳や現代作品の初演も多い。コンセルC会員。



#### 根岸 一郎 (ねぎし いちろう・バリトン/ピエール)

武蔵野音楽大学声楽科、早稲田大学文学部仏文専修卒業。パリ第IV大学比較文学修士課程終了。第29回フランス音楽コンクール第2位、第11回日仏声楽コンクール第3位、H. ソーゲ国際コンクール2000 フランス歌曲賞。グレゴリオ聖歌から現代歌曲まで幅広く活躍している。東京室内歌劇場、コンセルC会員。ヴォーカル・アンサンブル・カペラ他メンバー。



#### 本宮 廉子 (もとみや きよこ・ソプラノ/ルイゼン)

日本大学芸術学部音楽学科卒業、同大学院修了。フランスにて夏期国際アカデミーを受講。バロック、古典派の作品をはじめ、ブラームス、フォーレ、プーランク等宗教曲のソリストとして活躍するほか、アンサンブル活動も多数。現代作曲家の作品演奏や録音にも参加。日本ヘンデル協会、日本セヴラック協会会員。



**館野 泉** (たての いずみ・ピアノ)

1936年東京生まれ。東京藝術大学首席卒業。64年よりヘルシンキ在住。2002年脳出血により右半身不随となるが、04年「左手のピアニスト」として復帰。シベリウス・メダル(2006)、旭日小綬章受章(2008)、東燃ゼネラル音楽賞本賞(2012)ほか受賞歴多数。南相馬市民文化会館(福島県)名誉館長、日本シベリウス協会会長、日本セヴラック協会顧問。毎年7月に「デオダ・ド・セヴラック音楽祭」に参加。サン・フェリクス＝ロラゲ名誉市民。

**久保 春代** (くぼ はるよ・ピアノ)

東京藝術大学音楽学部卒業後、フィンランド政府給費留学生として国立音楽院シベリウスアカデミーに留学。在学中より北欧各地で演奏活動を行い、同校ディプロマコースを最優秀で卒業。帰国後はリサイタル・室内楽・放送などで活躍するほか、オウルンサロ音楽祭などフィンランドの音楽祭等にも出演している。セヴラックピアノ作品集(全4巻、音楽之友社)の解説のほか、楽譜の翻訳・監修も多く手がける。日本セヴラック協会会員。

**平原あゆみ** (ひらはら あゆみ・ピアノ)

桐朋学園大学卒業。フツベル平和祈念鳥栖ピアノコンクールグランプリ、鹿児島新人演奏会・県知事賞受賞。オウルンサロ音楽祭に出演(04,06,07年)。07年、セヴラック音楽祭にてセヴラックの「大地の歌」を演奏。06年、11年に自主公演リサイタルを行い、セヴラックのピアノ三部作をすべて演奏。現在、館野泉氏のもとで唯一の弟子として研鑽を積んでいる。日本セヴラック協会会員。

**木村麻衣子** (きむら まいこ・フルート)

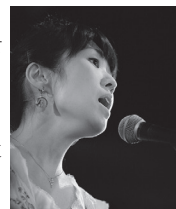
東京学芸大学大学院修士課程修了。東京藝術大学別科修了。第14回市川市文化会館新人演奏会オーディション優秀賞受賞。2011年トーキョーワンダーサイト主催「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル」に参加するなどソロ、室内楽において幅広く活躍する。日本フォーレ協会会員、日本セヴラック協会会員、北鎌倉女子学園音楽科非常勤講師。

**會田 瑞樹** (あいた みずき・打楽器)

1988年仙台市生まれ。武蔵野音楽大学ヴィルトゥオーソ学科卒業、修士課程ヴィルトゥオーソコース修了。日本現代音楽協会主催第9回現代音楽演奏コンクール「競奏IX」において第2位入賞。現代邦人作品の魅力の追求を自己のテーマとして掲げ、年間数十作品に及ぶ新作初演を展開、その数はこれまでに50作品を超える。

**柴田 暦** (しばた れき／ふくろう)

桐朋学園演劇科卒。演劇活動の後、次第にヴォーカリスト活動に移行。'99年より、パフォーマンスグループ〈時々自動〉に出演。'10年にはPf. 大井浩明と「月に憑かれたピエロ」を演奏した。現代詩や自身の書くナンセンス詩の朗読も行い、演劇やアートとの交差も多い。共演者に、館野泉(pf)、高瀬アキ(pf)、ブルーノ・カニーノ(pf)、大友良英(gui)、関根真理(perc)など。CDに、河崎純(cb)とのデュオ《ユニ・マルカ》(ZIPANGUレーベル)。

**末吉 保雄** (すえよし やすお・ピアノ、編曲)

1937年東京生まれ。東京藝術大学、パリ・エコールノルマル音楽院作曲科卒業。早くから故古澤淑子先生の下でリハーサルピアニスト、女声合唱指揮などにより、フランス歌曲研究会の活動に加わった。作曲家としては声・笛・太鼓を含む作品を数多く作曲している。また日本フォーレ協会の企画にも参加し、論文の執筆、講演などを行っている。日本セヴラック協会顧問。

## 歌劇《風車の心》日本セヴラック協会版のこと

末吉保雄

日本セヴラック協会は、セヴラック唯一の劇場のための歌劇《風車の心》の初演100年にちなみ、2009年以来、年2回の例会で一場ごとの試演を続け、昨秋、最後の場を終えました。オーケストラ総譜も（当初は音源も）入手できず、主にピアノスコアに依りながらの勉強でしたが、進むにつれ、精緻で、独特の情趣をたたえるこの歌劇を、なんとか通奏して、少しでも多くの方々に聞いていただきたいと願うようになりました。

ただ、残念ながら、歌劇を上演するには当協会は経済的に無力で、きわめて限られた形でしか行うことが出来ません。あらかじめその行き届かぬ点をお含みいただき、きわめて独自の当協会版による演奏にご寛恕を乞うしだいで。

\*

1909年、オペラコミック座で初演された《風車の心》は、当時の歌劇の常として、オーケストラと合唱、それも大編成のものを伴います。とりわけ、作曲家セヴラックは、その管弦楽と多様多様な声のアンサンブルに、出身地ラングドックの民族音楽の音色や、風土、生活風習への賛歌を託し、登場する人々の心の葛藤を包みこもうとします。

たとえば、本来は、本日プログラムに記したソリストたちの他に、まずは次のような役を加えねばなりません。

麦の妖精（ソプラノ）、ロンドの妖精（メゾソプラノ）、  
年老いた物乞い（テノール）、サンタクロース（バス）

多くを歌うわけではありませんが、この4人の役は“幼い時の思い出”です。長い不在のちに郷里にもどった主人公ジャックに、生い立ちの日々を懐かしい出来事を歌い聞かせ、村の自然や人々から多くの恩恵を受けたことを思い起こさせます。

その「村人たち」を演じる「合唱」は、第1幕、葡萄の畑に出かけるときは「二群の混声四部合唱」、古い風車から聞こえる声を歌うときは「三声の男声合唱」、葡萄や麦、花の精などを歌う“自然の声”役では「三声の女声合唱」、葡萄を採って村に持ち帰り、一同で収穫を祝う“葡萄棚の踊り”では「混声四部合唱」、 “古い井戸”（昔、鉱石を採掘した跡）から聞こえる声を歌う「女声合唱のパートリーダーたち」…。

セヴラックは、これらの声が、ステージから様々に聞こえてくる、つまり、役割の多彩な分担に加え、立体的な効果を期待したと思われます。

さらに、歌い手たちのほかに、多数の村人、踊り手、村のヴァイオリン弾き、子供たちを登場させています。

以上は、セヴラックが楽譜に記した“18世紀末、ラングドック地方の村里”のそれらです。むろん、実在を写す意図ではなく、セヴラックにとって「あるべき」あるいは「理想の郷土」のイメージと思われます。

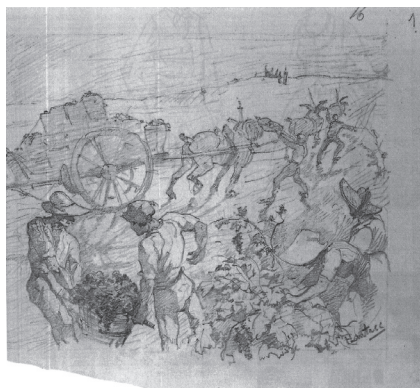
\*

本公演については、プログラムに記載の通りです。おのずから、この小劇場での「演奏会形式」に即す解釈を採りました。また、オーケストラに依らず、限られた出演者での通奏のために、多くはありませんが、省略と代替のための「編曲」をおこなっています。ソリストたちの歌に変更はありません。

\*

《風車の心》は、1903年、セヴラックが、地域の劇場向け一幕物の台本（「帰還」）に作曲したこに始まっています。これはが、詩、音楽ともに書き改められ、拡大されて今日の規模に至りました。

作者は、モーリス・マーグル（1877年トゥールーズ生まれ。1941年ニースで死去）。ラングドック（オック語文化）の古今の独自性を強く主張する、当時気鋭の詩人、劇作家でした（1895年に最初の詩集を出版。1909年、この地ベジエの野外劇場での野外音楽劇の作者。サン=サーンスやフォーレも作曲したこの劇場のために、セヴラックは1910年に作曲しています。そして後年、マーグルは“阿片夢”やサディズムの賛美者としても知られるようになりました）。



ロートレック画

## 歌劇《風車の心》あらすじ

### 第1幕

舞台は18世紀末のフランス南西部、ラングドック地方のある村の秋の夕暮れ。葡萄畑が広がり、彼方にピレネーの山並み。村はずれに風車が立ち、丘の上には大勢の村人がパンや葡萄酒を持って集い、葡萄の収穫に沸いている。

羊飼いの娘マリーは、昨夜、昔の恋人ジャックの夢をみて気分が沈んでいる。ジャックは仕事を求めて村を去り、そのまま戻って来ない。マリーは彼を待ちきれず、ピエールと結婚したが、裏切りの気持ちに苦しんでいる。

遠くからジャックの歌声が聞こえる。久しぶりに村に帰ってきたジャックは、故郷の美しい風景に、子供の頃やマリーとの逢瀬を思い出し、感慨に打たれる。

再会するふたり。変わらぬ想いを伝えるジャックに、マリーは自分が他人の妻となったことを打ち明ける。涙するジャック。マリーは自分のジャックへの強い気持ちに気づき、ふたりで村を出ようと言う。

村人たちとピエールが葡萄摘みを終えて戻ってきた。ピエールはマリーへの愛と感謝の言葉を強く語る。村人たちは久しぶりに会うジャックに喜んで声をかける。風車に住む年老いた粉挽きはジャックの名付親。子供の頃からジャックを息子のように愛してきた。ジャックの老母もやって来て、立派になった息子との再会を喜ぶ。歌いながら去る村人たち。そのとき粉挽きの耳に、マリーとジャックの話し声が聞こえる。

### 第2幕

夕方。葡萄摘みを終えた村人たちが風車の前で「葡萄棚の踊り」を踊る。

人々が去り、ひとり風車の前にたたずむ粉挽き。マリーがやって来るがジャックの姿はまだない。マリーの告白に驚いた粉挽きは、マリーを待たせ、ジャックと話をする。

現れたジャックの心は揺れている。粉挽きは彼をじっと見つめ、人の道と運命を説き、ひとりで村を離れるようにさとす。苦悩するジャック。そこにやってきた母親に粉挽きは、駆け落ちがピエールとその老母にもたらす悲劇を語り、子供の頃からジャックに、良いことをなすように、と教えてきたことを思い出させる。ジャックとの再会も束の間、老いた独り暮らしに戻る辛さを嘆く母親。

教会のアンジェラスの鐘が鳴り、子供の頃からジャックを見守ってきたフクロウが、姿を現す。フクロウの言葉に全てを悟ったジャックは、ひとり村を去っていく。

## 出演者より

セヴラック協会の例会のなかで少しずつ勉強してきた歌劇《風車の心》が、このような記念の年に皆さんの前で上演できることをとても嬉しく思います。

純粋な愛に突き動かされるマリーとジャック。ピエールは美しいマリーを妻にできたことを何より幸せに思っているとても純朴な人物であり、ジャックの母親は女手一つで彼を育て、彼の成長を何より嬉しく思っています。またジャックを息子のように見守る老粉挽きは、賢者のように村人の幸せと平和を願っています。すべての人たちが善意によって生きる、そんなありふれた貧しい村の暮らしの中で、ジャックとマリーは自分たちの力ではどうしようもない運命によって引き裂かれようとしています。周縁の土地で精一杯生きる人々の善意と愛、そこに囲まれたジャックの葛藤と悲しみがセヴラックの音楽にのせて語られます。

丘の上に立つ風車の羽がゆっくりと回り、皆さんの心の中にも優しい風が起りますように。

鎌田直純（ジャック）

バリトンの鎌田直純さんが「とても素敵なオペラがあるんだ！一緒に歌いませんか？」とお声をかけてくださったのは4年も前のことでした。不勉強な私は、その時までセヴラックの作品に触れたことがありませんでした。でも「マリー役は森さんにぴったりですよ！」という言葉に導かれて、張り切って勉強を始め、作品をそしてセヴラックという人物を少しずつ知ることができました。

このオペラは、登場人物一人一人がとてもまじめで誠実な人間として描かれています。ジャックもマリーも自分の心と向き合い悩み苦しみます。粉屋のおじいさんもジャックのお母さんも二人の気持ちを分かりながらも為すべきことをさとして。悩める登場人物たちの奏でる旋律線は、とても美しく切ない。それを包みこむオーケストラは、まるでサン＝フェリックス・ロラゲの大地のように雄大です。

そんな素敵な作品に出会えたことに心から感謝して、日本初演を務めさせていただきます。

森 朱美（マリー）

## 日本セヴラック協会の10年を振り返って

濱田滋郎

いつの間にか10年も前のことになる「日本セヴラック協会の」の設立は、若い頃からこの作曲家のもつ独特な魅力に惹かれ、時には機会——たとえば、1970年代に日本盤が出たアルド・チッコリーニの演奏によるLP版の解説——を頂いて“応援”の筆を執っていた私にとって、非常に嬉しい成り行きだった。何よりも、日本に組織として「協会」ができるほど、セヴラックの人と音楽を愛する音楽ファンが居られるのだ、ということが、嬉しい驚きだった。

以来、あの素晴らしいCD『セヴラック作品集』を出しておられることに加え、例会ごとに出席され独自の“左手”の芸境を披露されることからこの協会の“精神的支柱”であって来られた館野泉さんと並んで、たいへん及ばずながらこの協会の「顧問」として10年を過ごしてきたことである

会の活動の土台をなしてきたのは、年2回のペースでコンスタントに催されてきた「例会」である。「例会」は毎回、次のような3つの要素によって成り立ちながら続けられてきた。①セヴラックの人と音楽をより深く知り、よりよく味わうため、さまざまな分野の識者たちを招いての講演ないし講話。②セヴラックの作品、あるいは彼になんらかのゆかりを持つ作曲家の作品によるミニ・コンサート。ただし曲目は、会員有志がセヴラックにこだわらず自由に選ぶこともあった。皆が心待ちにした館野さんのピアノ演奏でも、曲目は「その折お弾きになりたいもの」が自在に選ばれた。③親睦パーティ。出席者一同が恒例の「ワインで乾杯」ののち、軽食をとりながら互いに交歓するひととき。

以上の①については、この私も何度か講師役をつとめ、たとえばセヴラックに関する古いSP期レコーディングの話をして何点かの復刻CDやSP盤を家でかけて録ったテープを聴いて貰ったり、あるいはセヴラックが愛し親しんだカタルーニャ地方（スペイン東北部、ただしその文化圏は南西フランスにもひろがる）の伝統的舞踏音楽「サルダーナ」について語ったりした。お招きしたゲストの中には音楽関係のみならず、歴史、美術などの専門家も居られ、セヴラックから切り離すことのできない南西フランス地方のあれこれを（スライドなどをも用いて）詳細に伝えてくださるのが、たいそう新鮮で、しかも重みのある体験となった。なお、こうした各例会の講演の「あらまし」は、たゆみなく発行されつづけてきた会報「セヴラック通信」（やはり年2回）の中に記録され、貴重な文献を成していることを記しておきたい。

②は主としてピアノによる演奏で、とりわけここ数年は会場が荻窪の「かん芸館」となり、そこには趣のあるプレイエル社のピアノが置かれているので会員の楽しみも増した。ピアノのほかでは、鎌田直純さんの活躍が特に思い浮かぶ声楽、時にはフルートなどによる器楽演奏も催された。ここ何年かは末吉保雄さん——ご専門の作曲のほか、卓抜な講演

者、すこぶる味わい深いピアニストでもいらっしやる——の肝煎りで、鎌田さんほかを実演者に迎えたセヴラックの歌劇《風車の心》が初幕から順次ピアノ伴奏で演奏された。言うまでもなく、これの集大成が、今回の「本邦初演」となったわけである。

③の親睦会もまた会にとって大切な役割を果たしてきたもので、そこでは会員同士が、アーティスト、研究者、一般の愛好家の区別なく、和気あいあいとした雰囲気の中に友情を深めることができた。ちなみに2007年「ゆかりの地」を訪ねる南仏へのツアーを企画、かの地で作曲家の子孫・縁者たち、セヴラックをレパートリーに持つ音楽家たちと交歓するなど、喜ばしい成果を取めたことも記しておかねばならない（残念なことに私は参加できなかつたのだが）。

会が歩みをつづけるうちに、日本におけるセヴラックの認識度が明らかに上がったことも、ぜひ記しておかねばなるまい。音楽之友社から4巻にわたり刊行されてきた『セヴラック ピアノ作品集』に注目しレパートリーに採り入れるピアニストたちが増えている。これは会が直接にたずさわった仕事とは言えないが、篤学者・椎名亮輔氏による日本初の単行本研究書『デオダド・ド・セヴラック』がアルテス・パブリッシングから上梓され、しかも同年度の「吉田秀和賞」に浴して声価を高めた。また同じ年、やはり椎名氏がピアノ伴奏を勤めるとともに解題を執筆された奈良ゆみさんによる貴重な「セヴラック歌曲集」のCDも世に送られた。

今回の《風車の心》上演もまた、大いに力となるであろう。これからこそ、日本においてセヴラックの真価はより広く認められ、掛替えのない彼の精神世界が、多くの人びとの心を潤すようになっていく。そうなるためにこそ、私たちセヴラック協会員は歩みを進めて行く。末筆になったが、音頭取り役の亀田正俊さんをはじめ、会の運営・諸事務のため絶えず努力を払って来られた「縁の下の力持ち」の方がたに深く感謝を申し述べたい。



## 〈連載〉セヴラック随想 (7)

濱田滋郎

### 昔の書籍から～1920年代に綴られた「セヴラック論」

現在ではフランスでようやく1枚のCD (Timpani 1C1176) も出されているとはいえ、長らく“幻のオペラ”に過ぎなかったセヴラックの《風車の心》が、ほぼ演奏会形式によるにせよ、このたび日本初演をみる。なんと素晴らしいことであろう。このオペラは1909年(デオダ37歳)12月8日;パリのオペラ・コミック座で初演されたのだが、その当時、どのような評価に浴したのかは、必ずしも充分には知られていない。セヴラックに関する初の伝記的著作となったパリ・ドラグラヴ社刊の『デオダ・ド・セヴラック』(1930)の中で、ブランシュ・セルヴァ(作曲家と親交のあった名ピアニスト)は、次のように記している――

「…たいへん不備な状況のもとに上演され、魅力的な(はずの)踊り付きの寸景が残念にも省略されたりしたにもかかわらず、聴衆のあいだでも、また新聞紙上でも、このオペラは概してたいへん好評であった。パリの一般的な音楽ファンも、また主要な批評家たち(当時定評高かった、ガブリエル・フォーレ、ガストン・カロー、ピエール・ラロ、アルフレッド・ブリュノーといった人びと)も、一様に讃辞を連ねた。とりわけ、作品を最もよく理解し、ふさわしい讃め言葉を贈った人はガブリエル・フォーレだった…」云々、と。

ほかにも何か、このオペラの初演時に於いて、あるいはそれに近い時期に書き残された評言の類はないのだろうか? と考えた私は、以前から手元にあった、ある書物のことを思い出した。それは1925年にリブレリー・ド・フランス(フランス書肆)という名の会社から出版をみた、『フランス音楽の50年(Cinquante ans de Musique Française)』という上下2部から成る大冊(上下併せて800ページを超える)である。これはほぼ1875年から1925年までに繰りひろげられたフランス楽界の諸相(作曲、演奏その他)をパノラマ的に描いた、「フランス音楽総合的現代史(当時)」のような書物で、当時(1920年代)を代表する評論家、研究家の分担執筆になっている。その第1巻の内容は「音楽劇場の建築」「オペラ」「オペラ=コミック」「オペレット(オペレッタ)」「交響楽(管弦楽)」の5章から成るが、その3章目、「オペラ=コミック」のページを繰っていくと、期待したとおりに〈Cœur du Moulin〉〈Déodat de Séverac〉の文字が目に入った(164ページ)。この章の筆者であるアンリ・マレルブ(Henri Malherbe)は、次のように記している――

「[1909年]12月8日、エルネルスト・ガルニエの作品、まっとうだが月並な2部分からなる音楽的コント《ミルティル》のあとに、幸せな驚きが待っていた。モーリス・マー



グルの台本、デオダ・ド・セヴラック作曲による2幕の抒情詩劇《風車の心》が初演されたのである。これは、深々とした魅力をおびたこの作曲家が、オペラ・コミック座に懸けた唯一の作品となった。これは短い傑作であり、その後再び同劇場のポスターに載らなかったことは不思議である。ピアノ伴奏版のスコアを見ても、初めから終わりまで、このオペラはひとつの魅惑である。そこには「自然」のもたらす情感があり、誰の心をも打つ靈感がある。こまやかで色彩豊かなテーマが、どの部分からも、澄んだ水のように湧き出てくる。残念なのは、しばしばワーグナー風なオーケストレーションが、清潔で純朴なこの夢幻劇を重苦しくすることだ。しかしながら流暢な優美さに満ちた《風車の心》は、讃嘆すべき資質に恵まれた一人のフランス人作曲家の才能をはっきりと物語る作品にほかならない。デオダ・ド・セヴラックのような芸術家が早世してしまったことは、フランスの舞台音楽にとって、酷い悲しみであったというほかない」

——この2巻の大冊の性格は、近代フランス音楽半世紀間（1875-1925）の概観をむしろ客観的に記録しようというもので、各筆者もその点に留意し、あまり個人的な感想を述べることは慎んでいるように思える。そうした中で、アンリ・マレルブは、敢えて上に訳したような、破格と呼べる褒め言葉を綴っているのである。《風車の心》には、それだけの魅力が具わっていた、ということであろう。

ところで、それならば、他のジャンルの作曲家としてのセヴラックは、彼が世を去って4年後に上梓されたこの大冊の中で、どのように評価されたのだろうか。そこで同じ上巻の中の〈La Symphonie〉の章（タイトルにもかかわらず、ここで扱われているのは、いわゆる“交響曲”のみではなく、広く管弦楽曲一般をも含んでいる）を読んでみると、この章の筆者である高名なエミール・ヴェイエルモーズは、次のように綴っている——

「アルペリック・マニヤールから対位法を、ヴァンサン・ダンディから作曲法を学んだデオダ・ド・セヴラックは、スコラ・カントルム創設の初期に、そこで学び、公にはフランク派の伝統を後世に伝えるべき立場に身を置いた作曲家の一人である。しかし実際には、セヴラックはフランクの後継者ではないばかりか、ヴァンサン・ダンディのそれにもならなかった。厳しい教義を受け入れるためには、彼は余りにもはっきりした個性的な気質を持っていたのだ。彼は、こうした言い方にこもる美的な力のすべてを込めて言うとして、ただ大地のハーモニーのみを感じ取る一人の田舎者であった。何よりも先に、彼はラングドックの大地に生きる音楽家であった。

このような精神と感性とのありかたは、必然的に彼を、作曲家たちが哲学に、モラルに、宗教的神秘主義に心身を捧げようとするあの部屋（スコラ・カントルム）よりはむしろ、印象主義楽派のほうへ近付ける。従って、このスコラの生徒が、たとえば《風車の心》の場合のように、心地よげな柔順さをもって、ドビュッシーの抗しがたい影響に身を委せたのも、異とするには当たらない。だから、もし作品のみを見て判断しようとするなら、このような作曲家を“スコラ派”の人びとにまじえて扱うのは不合理だということになる。だが、彼がつねに示した師ダンディへの感謝と忠誠、スコラに対して抱きつづけた好意などからすれば、ダンディ門下のポスト・フランク派のグループから彼を除外するわけにも行

かない。

デオダ・ド・セヴラックは、規模の大きい管弦楽の畑には少ししか作品を残していない。挙げられるのは生前出版されなかった交響詩《たそがれのニンフたち》（1901）、手稿が失われた《デイドーとエネアス》（1903）、《トリプティック（三部作）》、それにもうひとつの交響詩《蛙たちは王様がほしい（Les grenailles demandent un roi）》（1910）位である」（最後に挙げられたこの曲も、その後、所在が分からなくなったようである）。

さて、それなら、こんにちセヴラックの名を高めているものに他ならないピアノ曲に関しては？ その大著の中ではどのように述べられているのか？ とは、どなたも発せられるご質問に違いない。

たしかに、両冊のうち下巻のほうの111ページには、彼の写真付きで、セヴラックのピアノ作品に関する文章が載せられている。この文章の筆者は、じつは判然としない。下巻の巻頭にピエール・エルマン、シャルル・ケ克蘭、アンドレ・クーロワ、ルネ・デュメニル、レーモン・シャルパンティエ、ジョルジュ・シェプフェル、アンリ・プリュニエールといった論客たちの分担執筆だとうたってはいるのだが。「メロディ（歌曲）」「室内楽とピアノ曲」「宗教音楽」「音楽教育」「シャンソン、カフェ・コンセルの音楽」「指揮者たち」「ヴィルトゥオーソたち」「作曲家の肖像」とつづく諸章の、どれをどの筆者が担当したという説明は、どこにも見当たらないからである。

何はともあれセヴラックは上記のうち「室内楽とピアノ曲」の章に登場し、2ページ弱を費して述べられている。記述は彼の生涯のあらましをざっと述べて始まるが、生年1873年（正しくは72年）、没年1920年（正しくは21年）と、1年ずつ間違っている。

以下は少々、この筆者による記述からの抜粋を記すにとどめよう。彼は言う――

「セヴラックはミディ（南仏）に長く住まうようになり、年の大半を田園で過ごした。それはあたかも、彼が歌い抜いた大地、その情感が実に深く彼の作品に染み透っている「自然」と、同化するための献身であった。同時に複雑で、きわ立った個性の持主であったセヴラックは、そもそも、良心のすべてを込めて、スコラ・カントルムの理念と理論を受け入れた人である。しかしまた彼は、時に、現代的な潮流の先駆者、あるいは、ドビュッシーの靄がかかった印象主義と、こんにち優勢になっている、ざらざらした激しさ、明快さを探求する流派とを結ぶ、絆の役割を果たす者となった。彼の音楽は柔軟さと巧妙さに欠けるが、その代わりに力があり、輪郭がはっきりして気骨があり、真実味と、そしてとりわけ色彩に満たされている」

――なるほど、セヴラックとそのピアノ曲は、没してすぐの頃、少なくとも一部の人の口からは上のように見られていたのか、と知ることは興味深い。

## 第21回例会の報告

鎌田和夫

この冬は太平洋側にも多くの雪が降りました。予想を上回る積雪量に東京周辺も被害甚大。我が家の近くにある緑道に植えられていた大きな桜の木が根っこごと倒れ、無残な姿をさらしました。満開の時期には、そこだけぽっかり桜の花が消え、むなしく天空を眺めるだけでした。根っこも、そのままそこにあり、哀れを感じました。私事ながら二度目の心臓の手術をしたのが桜が開花した時であったからでしょうか。泥だらけの根っこが自分の弱った心臓のように脈打ち、切なくおもえたものでした。

第21回例会は昨年(2019年)の11月16日の小春日和の穏やかな土曜日に行われました。気温は平年並みの17度。例会の会場は人いきれで、火照るくらいの暑さになっていました。

今回、はじめて登場されたメゾ・ソプラノの小阪亜矢子さんとピアノの伴奏の内藤晃さん。トップバッターで初登場。小阪の歌でセヴラックの歌曲《夢》。詩はマラルメ。悩み苦しむ人が、夢の世界の中で救われていくという儂い歌。続いて内藤さんのピアノ独奏によるアルベニス《ナヴァーラ》。スペインとフランスの中間地帯であったような土地の田園風景を音楽にしたもの。それは未完の曲であったのを弟子のセヴラックが補作したという珍しい曲。

前半の最後は館野泉さんのピアノでシサスクの組曲《エイヴェレの星》から三曲を選んで演奏されました。左手の音楽祭が終了したばかりで「ちょっとピアノから遠ざかってたかった」と本音をチラリ。今日、奥さんのマリアさんが帰国したということで、成田まで送って行かれ、この会場にたどり着いたのがストレスだったとのこと。

子供の時から天体が好きだったというシサスクの星の音楽に触発され、詩が生まれました。題して『天空の星々』(19頁を御覧ください)。

休憩の後はセヴラックの歌劇《風車の心》第2幕第4場。はじめに末吉保雄先生のお話。「2009年からはじまった《風車の心》も、いよいよ今日で最終回となりました」という末吉先生の声がどことなく淋しく響いていたものです。ゴットンゴットンと聞こえてくる風車の音は心臓の音。暗くなりはじめたカルカッソンスのブドウ畑にアンジェラスの鐘がなっています。森まで響いていきます。

ジャックの母親役は前回の阪口さんに代わって小阪さん。フクロウは柴田暦さん。鐘の音は曾田瑞樹さん。マリーはソプラノの森朱美さん。ジャックはバリトンの鎌田直純さん。粉挽き老人はバスの森田学さん。ピアノは末吉先生。

ジャックはマリーを連れて村を出ようとするが、小さい時からジャックを見守ってきたフクロウが彼に語りかける。「お前を見守ってきたフクロウだよ。道に迷った時、励ましてやったフクロウだよ。お前が爪はじきにされた時に慰めてやったフクロウだよ。お前はこれから独り、村を去らなければならないのだ」というフクロウの忠告にジャックはうなずく。母親も「ピエールがかわいそうだ。一度、村を出て、また戻ってきておくれ」と強

く言う。鐘の音に押されるようにジャックは村を出て行く。その黄昏のわびしげに。風車の音の哀しげに。幕は閉じる（19頁の『ひとり淋しく』をご覧ください）。

さて、日本セヴラック協会が設立されて10年余が経ちますが、会員の顔ぶれも一定し、あたたかくまとまりのある組織としてあるから、ここまで来られたのでしょうか。このように居心地がいいというのは顧問の先生方のおかげです。館野泉、末吉保雄、濱田滋郎の各先生方の肩肘を張らない姿勢があるからです。館野先生のぬくもりあふれたユーモアいっぱいのお話に常に笑いが絶えませんし、末吉先生の理論的に話されるわかりやすい講義に感心し、濱田先生のスペインとフランスの重なる文化の蘊蓄<sup>うんちく</sup>に興味がそそられます。決して音楽だけに固執せず、幅広い人間観察の故でありましょう。門外漢の僕でも興味深く聞くことが出来るのです。それらの人々の穏やかな精神のあり方が、そうさせるのでありましょう。ちょっとない、とてもいい雰囲気なのです。来る人を拒まず、去る人を追わずの精神。

それは裏方をつとめる事務局のみなさんの頑張りによるところが大であることも見逃せません。セヴラックの音楽世界そのままではないでしょうか。自然の柔らかなぬくもりをいっぱい浴びた風景の中で作られた音楽そのままです。そんな親しみやすさがあるので。それらを愛している人たちの集まり。わざわざ大阪からやって来られる会員の方もおられるほどです。

10年の間で思い出すのは、セヴラックの生地を訪ねたことでした。2007年7月のことです。セヴラックの音楽そのままのなだらかな丘陵の重なり合うサン＝フェリックス・ロラゲの田園風景。セヴラックの住んでいた家。教会。ひまわりの海。クモの巣のシャンデリア。どれをとってもセヴラックの音楽が鳴り響いて来るようであります。

また、会場が代官山エナスタジオから、2010年春から荻窪のかん芸館に変わったことでしょうか。代官山は鉄筋地下一階にありましたが、荻窪になって木のぬくもりが優しく迎えてくれるようです。

最後に館野先生がセヴラックについて書かれた著書から引用します。

「彼自身好んで『田舎の音楽家デオダ・ド・セヴラック』と名乗っていたそうだが、それは決して卑下した言葉ではなく、『パリジャンのための作品を作る音楽家なんて（見かけと恰好だけだ）！』と言ってスノビズムやパリジャン気取りを蔑んでいた彼の、信念と誇りを表してもいたのだろう。『田舎の音楽家』という表現の根底には、すべてがパリに集約され権威づけられたいくことに反抗し『地中海域』という南の文化圏を主張した彼の考え方があったように思われるのである。（略）南仏の香りと気分、光と色彩を作品の中にも色濃く滲ませた。彼の芸術は、むしろそうした地域性に対する愛着によって、普遍的な高みにまで到達できたのである」と書いています。

それは、まさにフィンランドからヨーロッパを見つめている館野先生自身の姿でもありましょう。

天空の星

鎌田和夫

鐘を鳴らす星は 語らう星は  
 時を告げることが 幸せな愛を  
 あるのだからか ささやきながら  
 永遠の平和を 求めるように  
 願うことが 永遠の恋を  
 あるのだからか あどけなく楽しみ  
 安寧の世を 遊ぶことだろう  
 求めることが 遊ぶことだろう  
 あるのだからか 小さな星は  
 鐘を鳴らす星は 月よりも  
 暗黒の世界の 光りかがやき  
 血みどろな 聖なる天使  
 戦争を好み 無理難題を  
 愛しき命を 押しつけ迫り  
 捨て去ってしまう 奇妙な喜びを  
 かもしれない 面白がる夜

星は流れゆき  
 終わりのなく  
 命ある星は  
 あきらめを知る

星は流れゆき  
 終わりがなく  
 命ある星は  
 あきらめを知る

ささやけ愛を 老いた星  
 からまる星の いびつな光り  
 放射しながら 本音を吐き出せ  
 精いっぱい 口をひらき  
 愛を語れ

つぶやく星の なに食わぬ顔  
 たれに言う 大きな屁の音  
 ひとりごと 去りゆく星の  
 散りながら 跡形もなく  
 どこへゆく

消滅の星 自ら消えゆき  
 眩きは聞こえず 生まれゆく星に  
 死にゆく星たち 自死する星の  
 最後のうめき そのままに  
 心の星となる

星は流れゆき  
 終わりのなく  
 命ある星は  
 あきらめを知る

ひとり淋しく

鎌田和夫

ぶどう畑に 村人の  
 集いたわむる 秋の日の  
 収穫祭を 祝うとき  
 ほほえむ顔に 夕焼けの  
 ワイン片手に ほおをそめ  
 たのしき宴 はなやかに

フクロウの 告げる言葉の  
 重たさに ジャツクの胸に  
 ひびきゆく ひとり淋しく  
 村を去る マリー恋しや  
 影ひとつ 淋しく揺れて  
 流れゆき 風車の心  
 空るなる



# New Standard Piano Library セヴラック ピアノ作品集 1~4

全4巻  
好評発売中

編集 舘野泉・久保春代

## セヴラック ピアノ作品集 1

定価 1,620 円 (本体 1,500 円) / 菊倍判 64 頁  
ISBN978-4-276-43574-2

《休暇の日々から》第1集  
《休暇の日々から》第2集  
《ボンパドゥール夫人へのスタンス》

## セヴラック ピアノ作品集 2

定価 2,808 円 (本体 2,600 円) / 菊倍判 92 頁  
ISBN978-4-276-43577-3

《ラングドッグ地方にて》  
《日向で水浴びする女たち》  
《水の精と不謹慎な牧神》

## セヴラック ピアノ作品集 3

定価 2,052 円 (本体 1,900 円) / 菊倍判 104 頁  
ISBN978-4-276-43581-0

《セルダーニャ》5つの絵画的習作  
《夾竹桃のもとで》カタルニャ海岸の謝肉祭の夕べ

## セヴラック ピアノ作品集 4

定価 1,620 円 (本体 1,500 円) / 菊倍判 64 頁  
ISBN978-4-276-43586-5

《大地の歌》  
《即興曲第2番》《ヴァルス・メテック》  
《オータンの風》

(株)音楽之友社 〒162-8716 東京都新宿区神楽坂 6-30 tel:03-3235-2151 (営業) <http://www.ongakunotomo.co.jp/>

## 編集後記

日本セヴラック協会は2003年5月25日に発足しました。したがって昨年が10周年だったわけですが、昨秋まで9回にわたって演奏してきた歌劇《風車の心》の全曲演奏を上演するために、記念コンサートを今年に挙行することといたしました。折よく、フランスからセヴラック音楽祭監督のジャン=ジャック・クバイネさんが6年ぶりに来日。お祝いの日を盛り立ててくださいます。

10年間の軌跡は、舘野泉先生、濱田滋郎先生、鎌田和夫さんが書いてくださったとおりです。当協会のこれまでの活動の成果として本公演に至ったこと、そしてセヴラックを中心に人の輪が大きく広がって創造的な活動が続けられていることに、心から感謝しております。

セヴラック通信 第16号 2014 前期 日本セヴラック協会 会報

2014年5月25日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: [severac.japon@gmail.com](mailto:severac.japon@gmail.com)

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎舘野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: [kameyan@jcom.home.ne.jp](mailto:kameyan@jcom.home.ne.jp)

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン



